



TITLE:

生産力の問題

AUTHOR(S):

高田, 保馬

CITATION:

高田, 保馬. 生産力の問題. 経済論叢 1934, 39(1): 19-39

ISSUE DATE:

1934-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130468>

RIGHT:

京都市大學經濟學會 經濟叢論

第一號

第三十九卷

昭和九年七月一日發行

論叢

狩獵免許税に就きて

法學博士 神戸正雄

生産力の問題

文學博士 高田保馬

昭和五年の我が國民所得を論ず

經濟學博士 沙見三郎

時論

日濠貿易の調整

經濟學博士 谷口吉彦

研究

工場委員會の型の生因

經濟學士 大塚一朗

貨幣的景氣論史

經濟學士 柴田敬

植民地貨幣制度より見たる金爲替準備

經濟學士 松岡孝兒

記事

經濟學部創立十五年記念會記事

同上 記念展覽會陳列圖書目錄

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

生産力の問題

高田保馬

一

生産力と生産關係とが如何なる聯絡に立つか、このマルクス唯物史觀の最も中心的なる問題については、近時、といつても大戰後をさすのであるが、ほぼ三種の見解があらはれてゐる。勿論これらは必ずしも、戦後にはじめてあらはれたる解釋ではない。けれども、戦後に於ける社會狀勢の變化によりて格別の意義をもつやうになつたものである。

第一のものは、生産關係が生産力によつて、機械的、受動的に決定せらるることを認むるものである。而して此立場は多分、生産力の神祕的な自己運動を認めねばならぬであらう。第二のものは、生産關係と生産力とを峻別すると共に、二者ともに發展の内在的論理をもつとはするものの、其實、生産力の發展がむしろ生産關係の發展に従屬するものと見るのである。要するに、此二者はともに生産力と生産關係との二者を峻別し、對立せしむると共に、一方の發展を他方の發展に還元せしめやうとする。其異なるところ、前者は生産關係の發展を生産力のそれに還元しようとし、後者は生産力の發展を生産關係のそれに還元しようとする。『かやうに、機械論者は生

産力の發展を生産力の發展から分離し、生産關係の發展を生産力の發展に還元してゐるとすれば、ルービン型のメンシェヴィキ化しつつある觀念論者は、やはり同一の見地、即ち生産力及び生産關係はそれぞれ、それ自身の發展の論理をもつといふ二元的見地に止つてゐる。だから機械論者とは反對に、彼等は寧ろ社會的内容の發展を社會的形式の發展に還元しようとし、内容と形式との統一は相對的のものであるが、兩者の闘争は絶對的のものであることを理解しない。¹⁾』

此二に對して第三の見解は、生産力と生産關係とを切りはなして峻別することをせず、二者をあくまで形式と内容との關係に置き、兩者の發展が所謂辯證法的相互作用に於て行はるるもの、而してマルクスの云ふ所の生産力の動きに應じて生産關係の動きが定まると云ふのは、形式に對する内容の優位を意味するに外ならぬとする。此見解は、今日のマルクス學派に於ては正統的のものであり、つねにレニンの名と結びつけて主張せらるるものであるが、その背景を考へて來ると、露西亞の新しい社會的狀勢がこれを支配的なものとなした、とも云ふべきである。勿論、生産力と生産關係との聯絡を、形式と内容とのそれと見ることは、どこまでマルクス自身のものであるかは、別に考ふべき問題であるにしても、既に明にプレハアノフによつて力説せられて居り、從つて戰前から解釋と見るべきではあるが、それが重要な意義を得るに至つたのは、戰後の露西亞の狀勢に負ふものであること云ふまでもない。

マルクスは屢々、生産關係を以て生産力の發展形態とのべてゐる。またドイツチエ・イデオロギイに於ては、後に生産關

1) ラズウモフスキイ、史的唯物論、村田春雄譯 p. 174.

係と云ふべきところに、つねに交通形態といつてゐる。なほ資本論の中からの一例。『労働過程の一定の各歴史的形態は、更に此過程の物質的諸基礎と社會的諸形態とを發展せしめる。或る一定の成熟段階に達したる時、一定の歴史的形態は、剝落せられて、高級なる一形態に位置をゆづる。』このとき、生産の物質的發展とその社會的形態との間に、一の衝突が起つて来る。『生産關係を以て（更に進みては上部構造をも合せて）社會的なる形式と見る考へは、マルクスの全述作を貫いてゐるといつても過言ではないであらう。さう考へると、生産力と生産關係とがプレハアノフに於て明確に、形式と内容との關係に置かれたことも、當然のことである。』社會人の自然への生産的働きかけと、この働きかけの過程に於て行はるる生産力の成長、それが内容である。社會の經濟的構造、その所有關係、それが形式である。形式は所與の内容によつて生み出され、その内容の爾後の發展の結果×××の一たび形式と内容との間に矛盾が生ずるや、それに緩和せらるることなく、内容の不斷の成長——それは舊い形式が新しい必要に應ずる速ないほど速に成長する——によつて益々成長する。かくて早晩、舊形式の排除と新形式によるその代置とを必要とする瞬間が到來する。かくの如きがマルクスの社會發展理論の意義である。』（プレハアノフ全集第十一卷一八〇頁）

二

まづ、生産力と生産關係との聯絡を機械的受動的のものと見る立場、所謂機械論的立場について述べよう。此立場はブハアリンを以て其顯著なる代表者とする。

此傾向の礎石を置いたものとして、ボグダノフが數へられる。ブハアリン學派に屬するものとして、アイヘンゲルト、マレツキイ等があげられる。マルクス・レーニンの唯物史觀に對する此機械論的修正は、右翼傾向のイデオロギイとして役立つと見られる。（アベズガウス、ドウウコルによる）

戰前に於て支配的であつたマルクス唯物史觀解釋によると、生産力は道具又は生産手段と同視せられ、生産力の動きは即ち技術の動きであると共に、生産力は生産關係から獨立に變動し、それがかつては生産力に應じて定まれる生産關係を追ひこすに至るや、そこに生産力と生産關係と

2) アベズガウス・ドウウコル、辯證法的經濟學方法論、岡本稻葉譯 p. 64. による。

の間の矛盾が生ずる。と考へられてゐた。此場合、生産關係に若干の反作用をする力が認められないわけではないが、それは根本に於て、受動的地位に置かれてゐる。マルクスの遺したる數多の文献の中には、かういふ解釋を基礎づけうる文句も決して少くはないと思はれる。而して、戦後の機械論的修正といふのは、大體に於て、戦前に於ける支配的解釋の連續又は延長とも見るべきものである。

ブハアリンの立場から云ふと、生産力と生産關係とが切り離して考へられる。而して、生産力の動き、即ち技術の動きがそれ自體の論理によつて行はれる。而して、此技術の各状態に對應して生産關係が成立する。勿論、技術の動きがそれ自體の論理をもつと云ふことは、それが生産關係に依存しないことを意味するのである。従つてそれが何等原因なくして行はれることを意味するのではない。『ブハアリンの意見に従へば、生産力が社會的發展を規定するのは、生産力が一定の現實的總體としての社會と、その環境との間の相互關係を表はすからである。だが、環境と體系との間の相互關係は、究極のところ、任意の體系の運動を規定する因素である。云ひ換ふれば、ブハアリンは生産力の原因をば環境(自然)と社會との間の外的矛盾環境の外的條件の中に見てゐる。而して生産力とは、彼の解する所では、社會と自然との間の相互關係、社會が生活の糧とする物質エネルギーの量である。』³⁾生産力發展の原因を生産力の外に求むる見解は、生産力の制約者を地理的外圍の事情に求むるブレハアノフの見解と、一脈相通ずるものがあらう。此の如く生産力發展の原因を環境との關係に求むるにせよ、それが生産關係を離れて動くことを認むる點に於ては、生産力の動きが、少くも生産關係との聯絡から見て、それ自體の理論に従ふことを許すものである。

而して、此の如き事情によつて動くところの生産力に應じて、生産關係が定まる。此生産關係は生産力の一定の發達段階であるところの技術の状態に應ずる人間の配列である。『ブハアリンは生産關係を時間空間に於ける人間の配置、配列に還元してゐる。』關係は何に表現さるるか。それは時計の機構に於けるネジと同様に、各人はその地位をもつてゐる、といふことに表現せられてゐる。かやうに空間に於て、勞働場所に於て地位が一定してゐるといふところから、上記の配置配列は社會的勞働關係となるのである。』ここで生産關係といふのは、時間空間に於ける人間(生ける機械としてみられたる)の勞働配列のことであ

3) ラズウモウスキ前掲書 P. 117; ヴォリフリン・ガツク史的唯物論教程、白楊社刊 P. 217.

る。此關係の體系の心理的でないことは太陽と遊星との體系がさうでないのと同じい。⁴⁾要するに、ブハアリンによれば、社會と環境又は自然との均衡の表現としての技術が生産力である。此技術と云ふ物質的裝置に適合するところの人間の裝置が生産關係である。故に生産關係は一面から物質的生産裝置に均衡を保つところの人間の生産裝置である。

マルクス及びレニンの力説したるが如く、生産關係は物質的社會關係である。それに於ては物質的と社會的とが結びついてゐる。然るに、ブハアリンにあつては、生産關係の物質性を、關係そのものが物理的であると云ふことと解釋してゐる。かくすることによつて、生産關係の心理學的解釋乃至觀念論的解釋からは救はるやうに見える。即ち、生産關係は生産過程に参加する人間の強き意志の結果として形成せらるるといふカウツキイの見解、生産關係としての社會的聯關を人間の心理的聯關心理的相互作用と見るマクス・アドラアの見解の如きは、生産關係を心理化し、又は觀念化するものであるが、ブハアリンの見解は正しく、これらを斥けて生産關係の物質性を確認してゐる。⁵⁾けれども、それは同時に、生産關係を物理化し、その社會性を犠牲にしてしまつたとも云はれらる。技術乃至生産の物質的裝置に對する部分的機械として人間の配列がやがて、生産關係であるとしたならば、此生産關係そのものは物質的のものではあるであらうが、社會的のものではあり得ないであらう。

ブハアリンの所説については、これからそれに對する批評を加ふるに際して、補説することにしよう。

まづ、ブハアリンに於ける生産力の動きと、技術の動きとの同視は果して許さるべきであらうか。マルクス自身の所説の中には、かかる見解を支持するやうに思はるる部分も認められるし、從つて唯物史觀の早期の解釋の多くが、かかる見解を支持したることも決して偶然と見るべきではない。けれども、レニンは明かに技術と生産力との同視を否定してゐるのみならず、マルクス自身の所説とでも、生産力として技術又は勞動手段以外、あまたのものを含めてゐると見るべきである。此點については何れ後に詳述するつもりである。

ブハアリンの如く、生産關係が生産力に對して受動的地位に立ち、それ自體の發展の論理をもたぬと見ることは、社會的實踐の上に於て消極的態度を伴ひ易い。生産關係自體が生産力の上に根本的な作用を及ぼし得ず、ただそれに適應するに止まるものならば、結局新しき生産關係の成立と云ふことも、これが基礎となるべき生産力の十分に成熟するのをまつのでなくては、全く不可能の事であらう。生産力と生産關係との關係を下部構造と上部構造、即ち一階と二階との關係の如きものと見る限り、實踐上の能動的態度が基礎づけられたい。現在の露西亞の如き狀態に於ては、かかる見方は自然斥けらるべき運命をもつのである。『生産力の發展は社會の狀態とは關係なく、だからまた、階級争闘とも階級的矛盾とも關係なく行はるるところ

4) ラズウモウスキ前掲書 P. 154.
5) アベズガウス前掲書 P. 44.

の純然たる自動的過程と考へられてゐる。生産力の不十分なる發展は無産者革命の未成熟を證明する爲に、常に社會ファシストによつて引合に出される。⁶⁾』

生産力が生産關係から切り離されたる發展の論理をもつといふことは、二つのことを意味し得るであらう。其一。生産力が云はば自己運動を営むことを認むる立場があり得る。其二。社會的ならざる、従つて生産關係ならびに上部構造からの反作用を受くるにしても、根本に於ては、それ以外のものから定めらるることを認むる立場があり得る。ブレハアノフに於ける地理的事情、ブハアリンに於ける環境の外的條件の如きは、生産力の動きを説明すべき原因の地位に置かれてゐる。けれども、これらの原因が社會外のものに見らるる限り、生産關係、その他の社會的なものの側から見るときには、生産力は自己の論理に従つて動くものと認められうるであらう。ただ後の見解の當否については問題がある。まづ、地理的な事情はさまでに變化しない。これから、動いてやまぬ生産力の状態が説明し得らるべしとは、考へ得られぬことである。また、環境と社會との間の外的矛盾から生産力が變動するといふ主張も、同様な困難を含むばかりでなく、その主張の内容があまりに漠然たるものである。次に、マルクス自身の主張の中にかかる解釋を裏書すべきものがあるとも考へられぬ。畢竟、生産力の發展の獨立性を認むることは、生産力を不明の原因によつて動くものと見る外はない。『生産力と資本主義的關係との間に生ずる矛盾は、これを極めて簡単に、つまり生産力の獨立したる成長が資本主義的生產關係の發展を追ひこすといふやうに解してはならぬ。この矛盾をこのやうに解するならば、我々は明白な機械論的立場、ブハアリンやボブダノフや、彼等の追隨者たちの立場に立つことになるだらう。かくて生産力は歴史に於て不明なる原因によつて不變に發展するところのある超階級的な範疇一般に變ずるであらう。』

ブハアリンにあつては、生産關係が技術によつて決定せらるる人間の配置として見られてゐる。けれどもこのことは、生産關係を技術關係と混同するものである。物質的裝置によつて要求せられ決定せらるるものは、生産の必要から人人の入りこむ技術關係にすぎぬ。生産關係の中核をなすところの階級關係に至つては、全くかかる技術關係とは別のことがらである。それは生産手段の分配そのこととして、技術的配置の外にあり、従つて、それは技術關係として定まることではない。故に生産關係を勞働の爲の人間配置と見ることは生産關係の中の最も重要な部分を看過することである。私はかつて、生産力から生産關係が定まる、又は前者に後者が應ずる、といふことが、如何なる意味をもち得るかを分析した。そこに述べたところは別にブハアリンの學說を豫想してゐたわけではなかつたが、今最もよくそれにあてはまると思ふ。

6) ラズウモフスキ前掲書 p. 172.

7) 階級及第三史觀、唯物史觀より第三史觀までの章参照。

要するに、ブハアリンは生産力の上に及ぼす生産關係の作用を十分に認めない。而して生産力を經濟的範疇とみずして技術的範疇とみてゐる。ある場合、生産力を限界概念と認め、經濟への接近を認めたけれども、これを全く經濟的なものとは考へない。此點に於て、それは後に述ぶる正統的解釋となる。生産關係が云はゞ受動的外被に止まるが故に、實踐の意義は必然的に輕視せらるることとなるであらう。且つまた、生産關係が生産に於ける勞働の配置と同視せられてゐるが、これは生産關係の中核をつかむでゐない。加之、生産關係を此の如く見るによつて、それは生産關係の物質性を明かにしたやうに見えるが、それは生産關係の社會性を犠牲にした上のことである。

生産關係が物質的社會關係として、物質性と社會性を含むことは、多くの人人によつて高調せられる。ブハアリンはこれに機械論的解釋を加へ、人間の空間的配置とみるによつて、物質性を確保したものの、これは生産關係を物理化したものである。従つて、その中に於ける階級關係に見るところの社會性は失はれてゐる。生産關係に於ける物質性はさう云ふ物理的のものではなからう。生産關係が物質的生產過程の一面をなし、従つて物質的生産と切りはなしがたき聯絡にたつてゐること、ひいては物質的な生産力と切りはなすことの出来ない性質を、その物質性といふのである。さう見るときには、生産關係と生産力との切りはなしがたい統一を認むることが、其物質性を認むる所以であらう。勿論、物質關係を他の意味に解する見方もあるが、此點については、後にまた論及したいと思ふ。

三

機械論的立場が生産關係を技術化してしまふのに對して、觀念論的立場はこれを全く觀念化することによつて、云はば其物質性を失はしめようとする。勿論、此立場に於ては、生産力と生産關係とが別々に切りはなされてゐる。マクス・アドラアに於て、カウツキイに於て、生産關係が心理化せられ、ある意味に於て觀念化せられてゐることは上に述べたが、ブハアリンの機械論的見解に對して對蹠的立場にあるものと見らるるのは、ルウビンの見解である。もつとも、こゝにはルウビンの原作を参照する便宜をためから、手許にある若干の批評又は紹介をたよることにする。

『ルウビンの合理論的構成は、カント主義的二元論によつて貫かれてゐる。』ルウビンの理論によると、資本主義經濟に於ては其二つの異なる方面、即ち技術的方面と社會經濟的方面とを區別する必要がある。換言すれば、特殊の社會工藝學によつて研究せらるる生産力と經濟學の對象をなす生産關係とを區別せねばならぬ。』經濟學は資本主義的生産過程の物質的技術的方

8) シロコフ・アイゼンベルク辯證法的唯物論教程、廣島、直井譯；アベズガウス・ドウウコル辯證法的經濟學方法論、岡本、稻葉譯；

面ではなくて、その社會的形態を研究するものである。生産の技術又は生産力はマルクス經濟理論の研究領域に單に前提として入りこむに過ぎぬと云ふルウビンの立場に於ては、生産力と技術とが同視せられ、社會的なものは物質的なものから分離してゐる。かくして社會的形態、從つて生産關係は物質的ではない。ルウビンの見る所によると、資本主義社會に於ける生産關係は實買の關係であり、同等の權利をもつ經濟主體の關係である。從つて、資本家労働者の階級關係さへも、商品の交換といふものに還元せられてしまふ。ただ、生産力と生産關係との聯絡がどう考へられてゐるか。ルウビン自身の見解については二様の解釋が傳へられてゐる。一方の見方。『ルウビンは生産力を生産關係の内容として觀察しないで、その前提として觀察してゐる。そして彼は生産關係を消極的なあるものとして、生産力の外的なる被ひ——生産力に適應し、そして生産力の壓迫の下に作用するところのものとして觀察してゐる。此見解は』『新なる社會關係が生産力の發展に對して有する役割を否定するメンシエウイキ的反革命的イデオロギイの本質を反映してゐる。』『ルウビン及びスハアノフの見地からすると、無産者は生産力が成熟して、生産關係が單に生産力に適應するといふだけで、社會主義的なものになるといふまでまたねばならぬ。』ルウビンのするやうに『形式を生産力の受動的被として把握することは、不可避免的に、生産力發展にとつての新しき生産關係の役割の過少評價に導く。これはルウビンの理論をスハアノフのテエゼに接近せしめる。』¹⁰⁾

他方の見方。けれどもルウビンはある會の報告に於て、生産關係は生産力發展の受動的反射でないと言明したと云ふ。¹¹⁾ルウビンの見解について他の解釋の加へられてゐることも偶然ではない。その解釋によると、ルウビンの立場に於ては、生産力と生産關係とが全く切りはなされる。而して、生産力及び生産關係がそれぞれ、それ自身の發展の論理をもつと云ふ二元的見地に止つてゐる。進みて云へばむしろ、生産力の發展を社會的形式即ち生産關係の發展に還元しようとしてゐる。¹²⁾私はいまここにルウビンの見解の解釋として、何れが正確であるかを判定すべき材料を有しない。けれども、この場合、重要であると認むるのは、第二の解釋である。而して此方面を明確につき進めるものとしてカアレフがあげられる。從つて、ルウビンの見解がどうであるにもせよ、此第二の解釋の内容は、やがてカアレフの見解である。而して、このカアレフ的なルウビンの見解こそは、まさしくブハアリンの機械論的見解に對して對立的地位を占むものである。

機械論的解釋は形式を内容に從屬せしめる。前者の發展を後者の發展に還元する。然るにカアレフ的乃至ルウビンの觀念論的解釋に於ては、むしろその逆なる方向に進む。形式は内容に對して別の發展の論理をもつばかりでなく、生産力の發展

9) 史的唯物論教程 p. 392-303.
10) アベズウ前掲書 p. 71; シロコフ前掲書 p. 301.
11) アベズウ前掲書 p. 71.
12) ラズモフスキ前掲書 p. 174.

が所與の形式の限界内に於て行はるるが故に、即ち生産關係の限界内に於て行はるるが故に、生産力の發展は社會形式の發展法則の中に含まれてゐる。内容の發展は形式の發展に還元せられる。カアレフは形式に對する内容の優位を云々するに拘はらず、此優位は物質的な性質のものではなく、純理論的な性質のものである。ラズウモスキの敘述から引用しよう。『ルウビンを公然と支持したカアレフの意見によると、内容是一定の形式を指定し、且つ前提するといふ意味に於て、形式に對してある優位をもつ。しかし他方では形式は、ひとたび發生するや、内容に對して消極的な、外的なものであるものでなく、それはむしろ發展のある内在的論理をもち、内容との辯證法的相互作用を前提し、最後に所與の形式の限界内で發展する内容と矛盾するに至る。』カアレフの言葉によれば、内容はたえず、一定不變の特定の形式を指定すると同時にこれを前提する。換言すれば、生産力の發展は生産關係の範圍内に於て所與の形式の限界内に於て行はれる。要するにカアレフにあつては、内容即ち生産の物質的な、眞に歴史的な發展がないのである。カアレフは社會的内容と社會的形式との矛盾をふくむ統一としての、即ち兩者の争闘に立脚する統一としての、生産様式の發展を社會的形式の發展の内在的論理によつて、觀念論的に置きかへてゐる。¹³⁾

メンシエグイキ化したる觀念論と稱せらるる此ルウビン・カアレフの見解に於ては、まづ生産力が機械論に於けると同様に技術と同視せられる。それと共に生産關係と生産力とが切りはなされ、それぞれ別の發展の論理をもつものと見られ、進みて云へば、生産關係の發展が生産力の發展を含むものと見られる。而して、二者の争闘に立脚するところの統一を見ない。加之、生産關係が交換實質と同視せらるることによつて、その階級的な性質が失はれて居るし、又その觀念化によつて物質性が失はれてゐる。生産關係の能動性を誇大視するほどに認めてゐるが、此能動性を十分に理解することは、生産關係の階級的性質を切りはなしてゐる以上、不可能のことであらう。これらはまさに、所謂マルクス・レーニンの正統派的立場から下され得る批評であらうと思はれる。

私自身の立場から云ふと、生産關係そのものを生産力から切りはなして之を二元的に考ふことを否認するわけではない。又生産關係が生産力を決定すると見る主張を否認するわけではない。この觀念化的傾向は根本に於てまさしく、社會を中心とする史觀に近づけるものであると考へる。ただ生産關係が如何にして生産力を決定しゆくか、此決定の機構が明にせられてゐないのみならず、階級關係を抽象してゐるところの生産關係からはこれを説明することが困難であらうと思ふ。また、生産關係が自己自體の發展の論理をもつと云ふものの、それは自ら動く性質をもつものではないであらう。その自動性を認むることとは史觀の上に一の新たな神を然り、ヘーゲル史觀に於ける自己運動者としての精神に代る新たな神をもちこむことになるで

あらう。さうでない立場に立たうとするならば、此生産關係が如何にして、また如何なる原因によつて動くかが明にせられねばならぬ。カアレフの方針は史觀として正しい見方に進みつつあるが、ただ内容に於て粗雑を免れない。

四

機械論的な解釋と所謂メンシェヴィキ化したる觀念論的解釋とを述べた。次に正統派とも云ふべき立場を述べようと思ふ。勿論、これは理論的にみてマルクス學說の正しき解釋と見るべきものであると云ふのではない。レニンのマルクス解釋であると共に、露西亞の國情が實踐的必要から肯定すべきものとしてゐるところである。社會事情の變遷は勿論、此解釋をもくつがへす時なしとしないであらう。

さてかかる立場によつて、生産力が次の如くに解釋せられる。生産の諸要素が生産の爲に結びつけられてゐるときに生産力となる。従つて第一。道具、又は技術はそれ自體として生産力ではない。それは生産の可能的要素ではあらう。けれどもそれは死物である。「勞働と云ふ生ける焔のみが、この要素を死物から甦らせる。生産に於ける勞働力との結合に於てのみ、これらの物的勞働手段は勞働の生産能力の現實的要素即ち生産力となる。¹⁴⁾第二。勞働手段、即ち道具のみが生産力として數へらるべきではない。協働の仕方は一の生産力であり、革命的階級は大なる生産力であると云ふマルクスの表現は、生産力が常に、生産過程の物的要素と人的要素との統一を意味すること、勞働力が生産力の重要な部分であると共に、生産關係が生産力で（時としては破壊

14) アベズガウス前掲本 p. 61.

力ですらも）あることを示してゐる。生産力と生産關係との聯絡は後にまた正面から之を取扱はう。勞働力が一の生産力であることを認め、その生産に於ける役割は生産關係、別して階級的事情によつて著しく左右せらるることを考ふときには、單に技術乃至道具だけを以て生産力となし、これらの状態のみを以て、やがて生産力の状態であると見ることの如何に誤れるものあるかを知るべきである。ただ此の如くに考ふときには、道具の遺物を以て社會組織を推知し復原しうべく、前者は後者の指標として役立つと云ふ資本論の文句をどう解釋すべきか。表面から素直に考へてみると次のやうに考へられる。生産力とは道具であり、生産力の動きは道具の性質、即ち技術の動きである。此技術の動きによつて、生産關係が定まり、生産關係によつて他の社會關係、從つて上部構造が定まる。社會組織の全構造は一定の生産力に應ずるものであり、此生産力の段階はやがて技術即ち道具の性質の段階である。だから道具の遺物は、社會組織の指標として役立つはずである。ところがかう云ふ表面の素直なる解釋を許し得ないやうに、生産力の動きが技術の動きであるとは云はれ得ず、生産力即ち道具あると云はれ得ないならば、問題とする表現はどう解釋すべきであらうか。

生産關係を受動的なる被決定的地位にあるものとするならば、表面から素直なる解釋といへるものに到達すべきであらうし、これが早期の解釋でもあつたと思ふ。けれども、その見解がすてらるる以上、やはり解釋は變らねばならぬ。新しい生産關係、從つて生産様式（生産力と生産關

係との統一としての)はただその發展した形に於てのみ、特定の技術的基礎の上に立脚してゐる。技術がまづ變化して新しき生産關係がその上に成立するのではない。從來の技術的基礎の上に新しき生産關係が成立する。しかし此生産關係、從つて生産様式が發展して技術的基礎と一致しなくなる、前者はそれに應じたる技術的基礎を作り出す。だから一定の生産様式、從つて生産關係はその段階の初期に於ては特有の技術をもたず、その發展したる段階に於てのみ、特有の技術をもつとの意味に於て、技術的基礎は社會關係の指標となる。『歴史的發展は機械論者の公式の方向をとらず、初めには必ず技術が発生し、次にこの技術に制約せられた經濟が生ずるといふやうなものでは決してない。各々の新しい生産様式は、その發生期にあつては舊來の社會的構造の胎内に見出した技術から出發する。新しい生産様式の發展は、それを舊來の技術的組織と矛盾に陥らしめるやうになる。この矛盾は、新しい生産様式がそれに適應した技術的基礎を作り出すことによつて解決せられる。例へば、資本主義的生産様式は、舊來の手工業的基礎の上に發生して、封建的技術と矛盾に陥り、産業革命時代に機械生産へと移つてゆかねばならなかつた。』¹⁵⁾ただ此の如き解釋がどこまで「生産力の狀態が生産關係の狀態を決定する」と云ふ本來の立場と一致するか、これは殘されたる問題である。

生産力と生産關係との聯絡がどう考へられたか、これを正面から考察しようと思ふ。云ふまでもなく、此正統的な立場は二者を内容と形式との關係に於て見る。此見方がマルクス、エンゲ

ルスによつて、どれだけ力説せられてゐるか、今詳しくは考へ得ない。ただ、生産關係が一種の形態として明示せられてゐるのではないか。これを明確に、形式内容の關係に於て見たのは、前に述べたるが如く、プレハアノフであるし、而して、レニンまた、同様の立場に立つものである。ただ、プレハアノフはこれを形式内容の關係に於て見ながら、やはり生産關係を生産力の上部構造的のものと見てゐるが、此間に若干の矛盾を見るべきであるか否か、今直に斷定するだけの考察を加へてゐない。

生産過程¹⁶⁾又は生産様式¹⁷⁾の形式と内容として二者が考へられる。而して此形式としての生産關係と、内容としての生産力との闘争に立脚するところの統一として生産様式が考へられる。而して此統一は相對的のものであるが、争闘は絶對的のものである。此點を知る爲には形式と内容との關係を豫め知ることを要する。『形式と内容との相互關係に對する正しい理解は生産力と生産關係との辯證法を正しく理解する爲の條件である。而して機械論的世界觀へ導く形式と内容との同視も、カントの先驗論に導く形式の内容からの絶對的分離も共に、辯證法的唯物論にとつては、同じ程度に無縁である。』

プレハアノフが、生産力を内容として、生産關係を形式として見たことは前述の如くである。『形式は内容によつて生み出され、その内容の爾後の發展の結果破壊される。一たび形式と内容との間に矛盾が生ずるや、それは緩和せらるることなく、内容の不斷なる成長によつて益々成長する。』これによつてみると、内容のみが自ら伸展し、形式はそれに追隨し、或はこれに遅れると解すべきやうに見える。

16) ラズウモフスキ前掲書 p. 169.

17) ラズウモフスキ前掲書 p. 173; ヌオリフソン前掲書 p. 300.

『あらゆる發展の發條たる形式と内容との矛盾は、兩者の統一を否定するどころか、それを前提とするものである。』此場合、『形式は内容的形式、生ける實在的内容の形式であつて、内容と不可分のものである。』即ち、『形式は本質そのものによつて指定せられ、對象の發展徑路に於て、この本質によつて規定せられつつ、この對象の内在的内容、合則性と不可分に結ばれる。』『形式は内容であり、其發展せる規定性に於ては現象の法則である。』けれども形式と内容との統一は其同一ではない。統一は二者の本質的區別の中に存する。『内容は形式を通してのみ、形式を媒介としてのみ發展する。』また、内容と形式との發展に於けるあらゆる統一は、この兩者の相互浸透であり、同時にその相互排除である。これらの對立物の爭鬭である。かくして内容も形式も獨立したる發展の論理をもつてではなく、又其中の一方が他方の發展を含み、且つ從屬せしむるところの、或る自足的のものであるわけでもない。形式としての一定の生産關係は、内容たる生産力の變化の影響の下に成立する。『けれどもそれは、その下で生産力の一層發展する所の形式を與へる。』即ち、形式も『能動的である。内容は形式を通してのみ、形式を媒介としてのみ發展する。』而も此形式が内容を發展せしむるのは、一定の歴史的時期に限る。此限界をこゆれば、形式によつて發展せしめられたる内容は、所與の形式と一致し得なくなり、これを否定する此内容に基いて成立する新しい形式のみが、其後の運動の爲の條件を形成する。¹⁸⁾

私は上に述べたる見解を、簡単に要約してみよう。形式と内容とは同一のものでなく、又切りはなされた別々のものでもない。相互浸透の關係に立つて、形式は内容であり、又内容は形式である。而も、二者は、はつきりとした區別をもつて相爭鬭し相互作用する。生産關係は生産力によつて、これが内容的形式として形成せられ、而も此生産關係の媒介によつて、生産力は發展する。發展したる生産力はやがて生産關係と矛盾し、その下に於て發展しなくなるから、これを破壊する。新しき生産力に應じたる生産關係が成立する。此相爭鬭する二者は生産様式としての統一を形づくる。生産様式の發展は此二者の爭鬭によつて實現せられる。

以上のことがらにただ二點を附記しよう。其一は生産力の優位であり、其二は資本主義社會に於ける二者の關係である。上に述べたやうに、生産力と生産關係の爭鬭對立の上に其統一があるとすれば、二者は全く相互的地位に立つものではないか、生産力が生産關係を決定すると云ふことが、如何にして云ひ得らるるか。『生産力の發展法則は、我々が形式に對する内容の優位、形式と内容との爭鬭を忘れない限り、また生産力の内容の發展と社會的形態の發展とをとり違へない限り、歴史的過程の基礎として其一般的意義を獲得するであらう。』¹⁹⁾『大理石も美術家がこれに與ふる形式——例へば、彫刻には無頓着であるが、そ

18) ラズウモフスキ前掲書 p. 169 以下; アベズガウス前掲書 p. 64; 以下; シロコフ前掲書 p. 293 以下; ヴォリフソン前掲書 p. 301; 生産力論、白楊社刊 p. 81

19) ラズウモフスキ前掲書 p. 173; 生産力論 p. 81.

の本質的形式、即ちそれを現在あるが如くに作つてゐる所の形式に對しては無頓着であり得ない。』形式が内容的形式であり、生ける現實の内容の形式』であり、『本質そのものによつて指定せられ、對象の發展徑路に於て此本質により規定せられつつ、此對象の内在的内容と不可分に結ばれる。』かかる意味に於て、形式は内容であり、又かかる意味に於て、内容は形式に對して優位を保つのであらう。生産力としての内容はかかる意味に於て生産關係に對して優位をもち、前者が後者を決定するのであらう。勿論、生産關係は生産力の受動的外被ではないが、その變動につれてそれに適應しつつ變動する。

『生産關係が單に生産力の發展を反映するところの受動的外被でないと云ふことは、資本主義社會の生産關係と生産力との相互關係を一瞥することによつて知られる。』資本主義生産の運動の機構は、個々の資本家に對して生産力の發展を強制するやうに出來てゐる。資本主義經濟の諸條件に於ける生産規模の決定は、個々の資本家の思惑に任せられる。併しながら、その動因となるのは餘剩優位の占有、而も單なる占有でなく、益々増大する規模に於ての占有である。』資本家はこの超過利潤を追つて技術を改良し、それによつて社會的生產力を發展せしめる。』而も『生産の擴大は資本の有機的構成の高位化を伴ふが、此高位化はまた利潤率低下の傾向をよぶ。ここに、資本主義生産様式下に於ける生産力發展の矛盾的性質が表現せられる。』これによつて知らるるやうに、生産關係のある與へられたる體系は、一たび生起したる以上、その内部で生産力が運動するところの受動的外被であるに止まらず、内容の運動形式、その構造としてあらはれる。故に與へられたる生産關係は單に生産力の一定の發達段階に於て生起するのみならず、生産力の發展そのものも亦、ただ生産關係の運動を通してのみ實現せられる。この働きかけを生産力に對する生産關係の外部的壓迫と見なしてはならぬ、それは生産力發展の內的なる、特殊的に歴史的なる法則である。』此點については、更にこれ以上の説明を加へることをさけよう。これはすでにマルクス自身によつて詳しく説明せられたところであるから。²⁰⁾

今の場合、私は正統的立場に於ける此唯物史觀解釋が、どこまでマルクス本來の立場であるかについて、深く立入つて吟味することを避けよう。私の考察の眼目はそこに存しないのであるから。ただ、此見解が結局、私の云ふところの社會中心史觀（かつて第三史觀と稱したるもの）に歸着せざるべからざる所以を次に述べようと思ふ。

五

20) アベズガウス前掲書 p. 68; ヌオリフソン前掲書 p. 301-302.

21) アベズガウス前掲書 p. 65, 70.

22) 資本論改造社版第三卷第一回 p. 212, 220.

私は今まで、マルクス唯物史觀の三の解釋を述べて來た。ところがまづ第一のものは成立したい。これは生産關係乃至社會そのものに能動的作用を認めず。ただ生産力の一應の又は究極の能動性を認める。一應のと云ふのは、これがまた、社會以外のあるものによつて動かさるることを、認むる立場について云ふのである。勿論、かかる解釋に於ては生産力が道具と等置せられ、生産力の動きは技術の動きと見られる。これは嚴密に見て、マルクスの意義に於ける生産力及び生産力の動きの精確なる解釋ではないであらう。けれども私は今此點を問題としようとは思はぬ、又進みて云へば、生産力は決して道具又は労働手段と同じでないにしても、生産力の動きは主として技術の動きであらうし、此二者を同一のものであるかの如く取扱ふことは、多くの場合、許さるべきことであらうとも思つてゐる。ただ問題は能動性を生産力のみ認め得るか否かである。事實の上に於て生産關係が能動的であることは、他の二の立場の認むるところであり、又争ひがたい事でもある。けれども、このことを今は主張しない。ただ生産力のみ能動性を認むることの歸結如何を考へてみる。大體、史觀はつねに歴史に於て自ら動くもの、即ち自己運動者を求める。ヘゲルはこれを精神に求めた、マルクス唯物史觀は、これを生産力に求めた、と解せられる。従つて、唯物史觀に於ける生産力の地位は、あくまで自ら動くものとして考へられねばならぬであらう。此意味に於て、プレハアノフ、又はブハアリンに於けるが如く、地理的事情又は外圍との交渉によつて生産力の動きを説明し、生産力を被決定者の地位に置くことは許されが

たいことではないか。さう云ふ見方が成立するならば、歴史の動きを支配するものは地理的事情、又は外圍とのエネルギーの乃至機械的交渉であつて、生産力そのものではないはずである。加之、前にも述べたるが如く、變化の遅々たる地理的事情から生産力の急速なる變化を説明することは不可能である。又、人間の有意的努力によつて行はるる生産力の動きをエネルギーの交渉によつて説明することは、もはや歴史の平面、社會の平面を全く離れたる立場から、歴史の事實を説明しようとするのであり、全く不可能を企つるものであるか、さもなくば無意味の企てをなすものである。生産力は決して機械的のものではなく、レニンの強調するが如く、社會的な事象である。

生産力の動きを他の事情によつて説明すべからず、又説明し得べからずとすると、畢竟、『生産力は歴史に於て不明なる原因によつて不變に發展するところの』ものであらう。けれどもこれでは、神祕的な自己運動者生産力を以て、歴史を説明することとなるのではないか。生産力の如何にして自ら動くかが、十分明確に説明せられざる以上、此批評より免るることは、出来ぬであらう。

第二の解釋については、すでに云ふべきを云つた。それが生産力の動きを生産關係によつて説明すること、寧ろ肯定せらるべきである。けれども、生産關係が如何にして發展するかについては、ただ單にそれが自己自體の發展の論理をもつと云ふだけによつて明確にせられ得ない。又、

前述の如く、生産關係によつて生産力の如何に決定せらるるかも明にせられないと思はれる。これらの點を明にしようとするならば、社會を中心とする史觀に歸着せねばならぬこと、次の第三の解釋の場合と同様である。

私が正統派的解釋とよべるものにあつては、まづ生産關係の側から生産力を能動的に決定することが認められてゐる。否、そればかりではない。資本主義社會に於ける生産力の發展について考察せられてゐる如く、生産力は自ら動きうるものではなくして、さきにアベズガウスの主張を引用したるが如く、生産力の發展そのものもまた、ただ生産關係の運動を通してのみ實現せられる。従つて、二者の所謂辯證法的發展と云はるるものの真相は次の如くに考へられねばならぬ。各の歴史的段階に於ける生産關係の運動を通してのみ其生産力が發展せしめられる。而して此生産力に生産關係が應じなくなると、適應が行はれ、生産關係が改まると共に、またその中に新たな生産力を作り上げてゆく。生産力に適應しない生産關係は改められてゆく。この點だけを見ると、生産關係がある段階に達して生産力に決定せらるる過程がくりかへされるとも見える。けれども、此際、生産力の自己運動が認められてゐるわけではなく、それは生産關係によつてのみ動かされる。動かさるる姿は生産關係の歴史的性質によつて種々であらうが、資本主義社會について云へば、階級對立によつて規定せられたる利潤獲得の競争を通してである。だから、生産關係が生産力に適應すると云ふのも、自己の作用の結果と見るべき生産力の動きに自己の動きを對應

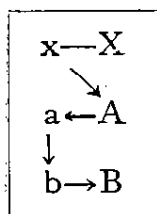
せしめるのである。従つて、生産關係の能動性がないとすると、生産力の動きは考へられず、生産様式の發展はないはずである。だから、二者の統一としての生産様式の動きに於て、能動的役目をもつものは、生産力ではなくして生産關係であると、云ふ結論に到達せざるを得ぬ。勿論、正統派的解釋からいふと、二者は形式内容の關係に於て、相滲透し相爭鬭するものであるから、二者を切りはなして、上に述べたるが如くに考へることは、許しがたい事にも見えよう。けれども、所謂辯證法的發展は生産様式の全體の運動の姿である。發展の内部構造乃至内部機構は、部分の因果的考察によつて明にせらるる外はない。マルクス自身といへども、常にこれを不可缺の考察方法としてゐる。ところが、かかる考察をつきつめると、正統派的解釋に於て認められてゐる事態の認識は、生産關係が生産力を決定するといふことに歸着する。而も、生産關係自體は自ら動くことはないか。それはただ生産力を動かすことによつてのみ自らを更めてゆくものであるか。マルクスの資本主義社會の分析は、やはり生産關係が利潤獲得の競争を通して生産技術の變化に關係なく、自ら變動してゆくことを示す。資本蓄積に伴ふ階級關係の變化の進行を考ふべきである。かくして、生産關係は一方に於て、生産力を動かすことによつて、又自己を變動せしむるのみならず、直接に自ら變動を遂行して進展する。

ここまで唯物史觀をおしつめて來ると、所謂正統派的解釋にもられてゐる眞の内容は、生産關係の動きが歴史の動きを決定すると云ふことである。而して、此主張は、社會關係の動きが、歴

史の動きを決定すると云ふ社會中心史觀と根本に於て相通する。此解釋は、革命的實踐の必要に迫らるると共に、事態を一層精確に認識する必要から、ここまで進み來れるものであり、唯物史觀が私共の抱いてゐる歴史觀に接近したわけである。ただ、唯物史觀に於ては、此生産關係の動きを十分に説明し得ないであらうこと、茲に述べたる如くである。

ラズウモフスキの到達してゐる生産力と生産關係との交渉の見解は支持しがたいやうに思はれる。其見解によると、初めに技術が発生し、次に此技術に制約せられたる經濟が生ずるのではない。舊き社會構造の母胎に見出す技術から出發し、生産様式がこれと矛盾するに及びて、新なる技術、即ち此様式に特有なる技術的基礎が作り上げられる。これを圖式的に示すと次の如くなるであらう。以前の生産關係Xに伴つてゐたxと云ふ技術の上に新しい生産關係、(従つて新しい生産様式)Aが成立する。けれどもxはAと矛盾する。Aはそれに適應した技術的基礎aを生ずる。これだけはラズウモフスキに特有なる見方であり、これによつて、露西亞の革命以後に於ける生産力の發達も説明せられてゐる。けれども、マルクス主義の通説として更に次のことが認められねばならぬ。生産力aは早晚發展してbとなる。さうすると、生産關係Aと生産力bとの矛盾が生じ、生産關係はbに應ずる姿、即ちBに轉じてゆく。Bは舊き社會構造の母胎にあつた技術的基礎の上にたてられたる新しい生産關係である。xとAとの聯絡がbとBとの聯絡に當る。ラ

生産關係
生産力



盾が生じ、生産關係はbに應ずる姿、即ちBに轉じてゆく。Bは舊き社會構造の母胎にあつた技術的基礎の上にたてられたる新しい生産關係である。xとAとの聯絡がbとBとの聯絡に當る。ラ

ズウモフスキの見解に於ては、A aの聯絡だけが對應の關係であり、道具の遺物によつて社會關係がしり得らるる關係である。而してx Aの聯絡は矛盾、不對應の關係である。然るに、これと同一の事情にあるb Bの聯絡は對應の聯絡となつてゐる。以前の社會構造の母胎にある生産技術を基礎として作らるるものは、此技術と對應すると一方では考へられ、對應せずと他方では考へられてゐる。そこに一の混亂がある。初期の資本主義的生産關係は、封建技術の上に發生したと云ふ。而して此間に對應の關係が認められてゐない。而も共產主義生産關係はどうして成立したか、生産關係が資本主義母胎内の生産力に適應する爲でなかつたか、首尾一貫するやうにする爲には、新しい生産關係の成立が生産力に適應する爲の變動でないといふことにならねばならぬ。けれども、これはマルクス唯物史觀の本來の精神とは相容れないやうに思ふ。ラズウモフスキの説明しようと思ふ事態は、他の理論を必要とするのではないか。